大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2025
No.
137

contents

特集　未指定文化財、どう調べる？
P1～P3 寺社の未指定文化財調査を進めています
P4～P5 未指定の古文書・歴史資料調査のいま
P6 大津市内の学校資料を再調査中

大津市歴史博物館
令和７年３月７日 発行

〒520-0037　大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

未指定文化財、どう調べる？

大学との古文書整理作業

沿革誌　堅田小学校蔵

南滋賀町廃寺出土瓦　志賀小学校蔵

寺社の未指定文化財調査を進めています

大津にはお寺と神社がいくつあるでしょう？

大津市には、延暦寺や三井寺、石山寺、西教寺、日吉大社など、全国的にも知名度の高い寺社が所在し、古くから文化財調査が進められてきました。そのため、大津市内の寺社には国宝や重要文化財、県や市の指定を受けた文化財が多く所蔵されています。

では、大津市内にある文化財の総量や内容が判明しているのかというと、決してそうではありません。国や県、市からの指定を受けていない「未指定文化財」もまた、膨大な量が遺されているのです。実は、大津市内には、お寺が約450、神社が約150あります。しかもこれは、地域の小さなお堂やお社は含まれていないので、実際はさらに数が増えると思われます。総数約600にもおよぶ寺社に眠る文化財を、彫刻・絵画・文書・工芸・建築などの各分野にわたって調査し尽くすのは簡単ではなく、まだまだ数多くの未指定文化財が眠っているのです。

そこで、当館では、令和４年（2022）から大津市内の寺社に所在する未指定文化財の調査を始め、各寺社にどのような文化財がどれほどあるのかを調べています。今回は、その様子について、特に仏像の調査に焦点をあてて紹介します。

調査ってどうするの？まずは実態調査から！

さて、一口に調査といっても、様々な手法があります。文化財の種類やかたちによって、調査道具や機材が異なるからです。

そこで、まずは「実態調査」を行います。寺社を訪問し、所蔵されている文化財の確認と簡単なスナップ撮影を行うものです。寺社の歴史は長いので、この時に棚の奥や

物置を探したら、住職や神職の方々も存在を知らなかった文化財が見つかることもしばしばあります。その後の基礎となる調査なので、所蔵者としっかりコミュニケーションをとりながら、すべてを記録していきます。

写真１は、坂本・大正寺の実態調査を行った際に、地蔵菩薩立像を撮影したものです。こちらの仏像は、これまで学術的な調査がなされてこなかった作例で、当館の調査によって平安時代中期（10世紀）にさかのぼるものと判明しました。

写真からわかるように、仏像は壇や台座に乗っていて人の目線よりも高い位置にあり、また薄暗い環境で安置されていることがほとんどです。また、実態調査では膨大（ぼうだい）な量の文化財をどんどん確認していく必要があるので時間もあまりありません。とはいえ、どんな状況であってもできる限り合理的な年代判断を下さなくてはいけないので、素早く慎重に観察します。

次は詳細調査！撮影が頑張りどころ

実態調査の結果、年代的に古いものや、寺社の歴史にとって重要と考えられるものについては、詳細調査を行います。この段階では、ストロボやバックペーパーを使用した全方位からの撮影や、細かい大きさの計測を行い、保存状態や構造についての記録をしていきます。

写真２は、写真１の仏像をストロボセットやレフ板などを使用して撮影したものです。仏像の特徴や年代判定の材料になる部分がわかる写真になるように意識しています。写真１との違いは一目瞭然（いちもくりょうぜん）で、写真２のような鮮明なデジタル画像や仏像の大きさについての記録をきちんと残すことで、その後の研究や展示･公開につながります。また、鮮明な画像は、現在の保存状態をはっきり記録できるため、文化財を保存活用する基礎データとなるのです。

写真３は、本堅田・本福寺の阿弥陀如来立像を撮影した際の様子です。左右のストロボの向きや強さ、レフ板を当てる角度など、様々な要素を調整しながら、仏像の良いところを捉えた写真になるように努めます。写真４はこの時に撮影したもので、向かって右側のストロボの光量を強く設定し、背面の微妙な衣の襞（ひだ）や背中の丸みが立体的

【写真３】本福寺阿弥陀如来立像の調査風景

【写真１】地蔵菩薩立像
平安時代　大正寺蔵

【写真２】同地蔵菩薩立像

【写真４】阿弥陀如来立像
鎌倉時代　本福寺蔵

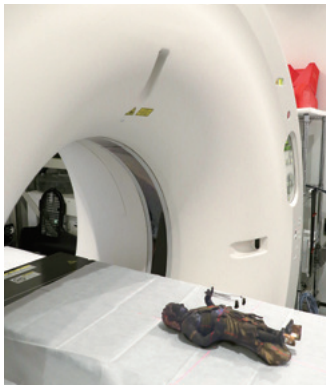
に見えるような写真を目指しましたが、いかがでしょうか。図録や展覧会場の展示パネルの写真にも、こうしたこだわりを詰め込んでいますので、どんな工夫をしながら撮影された写真なのか、ぜひ想像してみてください。

調査は終わりじゃない！X線CT撮影

しっかり撮影したからといって、調査は終わりではありません。構造について検討したり、他の作例と見比べたりするなかで、像の内部状況を確認したい仏像も出てきます。このような場合に活躍するのが人間ドックなどでもなじみのあるX線CT撮影です。実は、文化財のX線CT撮影は広く行われています。木材を複雑に組み合わせて作ることが多い日本の仏像には、構造を知るうえでとても適した調査方法です。

今年度は、歴博だより135号でも紹介した石山寺の不動明王立像について、市立大津市民病院の協力によりX線CT撮影を行いました。こちらの仏像は、第96回企画展「石山寺―密教と観音の聖地―」で鎌倉時代（12～13世紀）の作品として展示しましたが、表面が後補の彩色で覆われており、時代判定が難しい像でした。そこで、内部構造を把握し、より正確性の高い評価を行う必要があったのです。

写真5のように人を検査するのと同様に仏像を寝かせ、撮影をしましたが、水を主成分とする人間と、木製の仏像では撮影に最適な設定が異なるとのことで、初めは木の部分がはっきりと映りませんでした。ですが、診療放射線技師の皆様のおかげで、最終的には内部構造が明瞭にわかる写真を撮影できました。


【写真5】X線CT撮影の様子

今回のX線CT撮影では様々な発見があり、不動明王立像はとても特殊な構造をしていることがわかりました。来年度以降の研究紀要などで報告する予定ですので、ご期待ください。

まだまだ調べる！ファイバースコープ撮影

X線CT撮影以外にも電子機器を使用した調査方法があります。それがファイバースコープを用いた撮影で、仏像版の内視鏡のようなものです。頭部が体部から外れる仏像や、像の底や頭部に孔が空いている仏像の場合、ファイバースコープを内部に入れて、銘文や納入品の有無を調べることができます（写真6）。

今年度は、牧・真光寺の阿弥陀如来立像を対象とし、山岸公基先生（奈良教育大学教授）にご協力いただいて調査を行いました。この仏像は、過去に詳細調査を実施しており、鎌倉時代の優品で、後頭部の孔が像内まで貫通していることがわかっていたため、内部を観察すべき作例でした。調査の結果、銘文こそありませんでしたが、紙製の納入品が発見されました。その成果は今年度発行の調査報告書で報告します。

【写真6】ファイバースコープを用いた撮影の様子

現代の調査を支える先人たちの努力

このように、従来の調査手法に加えて、X線CT撮影にファイバースコープといった科学機器を用い、まさしく「仏像ドック」さながら、仏像を調査しています。

ただ、未指定文化財の調査が最近始まったわけではありません。展覧会の開催などにあわせ、膨大な回数の調査が本市によって重ねられてきました。

写真7は、今回X線CT撮影を行った不動明王を、平成3年に当館学芸員が撮影したものです。こうした写真が記録として残されていることによって、寺社に足を運ぶ前に、この仏像の時代はいつなのか、詳細調査を行うべき作例なのか検討することができ、効率的な調査につながっています。また、昔と比べて損傷がどれほど進行しているかなどの状態確認ができるため、文化財の保存にも役立つのです。

今後も、先人たちの努力を引き継いで、未指定文化財調査を進め、展示や公開、保存へとつなげていきたいと思います。

（学芸員　柘植健生）

【写真7】不動明王立像
鎌倉時代　石山寺蔵

未指定の古文書・歴史資料調査のいま

「未指定文化財」と聞くと、皆さんはどのような文化財を想像するでしょうか。国宝・重要文化財ではない「立派なモノ以外」と思う方がおられるかもしれません。しかし、答えはNoです。指定文化財は、ある一定の基準に照らして価値が確定しているというだけで、どのような未指定文化財も濃淡こそあれ、等しく歴史的価値を持つ貴重な文化財であることに違いはありません。ただ問題は、調査や整理が行き届いておらず、その価値がそもそも見出されていないということです。

特に古文書・歴史資料を見てみると指定文化財になっているものはごくわずかです。誤解を恐れずにいえば、数量的に古文書・歴史資料の99％以上が未指定文化財であるといってもよいと思います。

大津市では『新修大津市史』の編さんに関わって多くの古文書が調査や整理されましたが、現在ではそれら所在の確認とともに、当時未整理だった古文書の〈発見〉が続いています。また、個人の家や地域で保管・維持できなくなった文書群も未指定文化財として調査と整理を進めています。

古文書の調査・整理は人海戦術？

幸いにも当館と文化財保護課には古文書・歴史資料担当の学芸員が４人いますが、正直なところ手は足りていません。それだけ日々、大津で発見される古文書・歴史資料の件数や点数が多いという実情もあります。

では具体的に古文書調査・整理は何をしているかというと、個人の家や自治会・財産区であったり、寺社であったり、新たに古文書が発見されるとまずは「現状記録」を行います。これは、古文書が発見された状況や収納容器内の様子にも歴史情報が含まれていると考え、また過去に整理された形跡があるかなど、それらを丁寧に観察し、写真やイラストで状況を記録します。

次に行うのは古文書の「ドライクリーニング（掃除）」です。カビや虫害の状況も確認しつつ、現状を崩さないように刷毛などで掃除し、もとの箱や容器に戻します。筆者個人としては、この作業が一番好きです。それは、何が出てくるかのワクワク感と、掃除によって保存処置の第一段階が完了するという安堵感からです。ただそこには、現状を壊さないか、きちんと記録できているか、初めての整理者として責任が伴います。

ところで、こうした古文書が少量であればそれほど手はかからないのですが、何十箱ともなると話は変わってきます。博物館の通常業務の合間に進めなければならず、見通しを立てることすら難しくなります。

そこで、大事なのは外部機関との協力です。当館では令和３年（2021）から、古文書・歴史資料の分析を学問対象とする大学に調査・整理作業を委託しつつ、共同で古文書調査を進めてきました。具体的には、伊香立地域龍家文書を京都府立大学文学部に、膳所藩士中村家文書を佛教大学歴史学部にお願いし共同整理・調査をしています。このうち中村家文書については、その内容を前号の「歴博だより」で速報的にお知らせしました。現在は、番号を書いた付箋を古文書に入れていく作業が完了し、内容を精査しつつ、番号が確定したものから順次、和紙ラベルを貼付し始めました。こうして、古文書に番号が付与され、作成する文書目録（リスト）と照合できるようになるのです。

古文書の目録作成と解読

ところが、次におこなう文書目録の作成が実に時間のかかる作業です。古文書がどのような内容か、それぞれの表題、作成年月日、差出人、宛先人、様式、法量、丁数などの情報を一覧にしてまとめていく作業です。ここには当然、ある程度のくずし字の解読能力が必要です。最初は、簡単な「検地帳」「五人組帳」といった表題や、「享保十年」、「天保元年」などの年紀が入った古文書を読み取り、カードや表などに入力していきます。古文書を勉強しはじめのころは、こうした表題の定型句や数字から読めるようになっていきます。もし古文書を読めるようになりたいとお思いの方は、こうした古文書の目録作成を経験していくというのも一つの鍛錬になります。

ちょっと余談、古文書整理アルバイト

大学の文学部史学科で歴史を学んだ私も、くずし字をある程度読めるようになるまで、さらに学芸員になるまで、実に多くの文化財調査アルバイトの日々がありました。大

学院生時代には、週4～5日（2日は授業に出席）、毎日違う博物館や文化財関係部局でアルバイトをしていたことを思い出します。ハードな日々でしたが、色々な地域の古文書や歴史資料を実見し、整理させてもらう経験は、今につながるかけがえのないものでした。ただ、くずし字を読めない当時は、表題の「覚」すら読めなくて、また差出人の人物名は間違えるし、「寶（宝）永」を「寛永」と読んでしまうなど（100年位違ってしまう）、目録作成の致命的な間違いを何度もしてしまいました。そんな中途半端な仕事でお金を頂くのは申し訳ない、と頑張って勉強したものです。

かつてはこうした文化財整理のアルバイトはたくさんありました。しかし残念ながら今は予算の確保が難しい自治体・博物館がほとんどでしょう。そうした中で、古文書調査の大学への委託は、未来の学芸員を目指す学生さんの貴重な経験の場ともなると考えています。

古文書整理の目指すところ－史料集を作る－

このようにして古文書目録を作成した後は、1点1点の写真撮影をおこないます。もっとも最近では目録作成前に行うことも多くなってきました。これは、撮影した画像で目録を作成し、できるだけ古文書を開く回数を減らすことで保存につなげるという考え方です。

そして撮影完了後、改めて文書全体を見直し、特徴的な文書を中心に解読を行います。ここからは目録作成以上に、くずし字読解の能力が必要となるだけでなく、各時代の用語や社会状況の理解が欠かせません。解読作業も一人で行うのではなく、読んだものを別の者が校正をおこないます。そこで校正者の指摘が正しいか、それを校正する、という気の遠くなる作業を繰り返し、最終的に解読文を集めた「史料集」が完成します。

大津市歴史博物館発刊の史料集

当館では令和3年度から江戸時代の古文書解読を中心とした史料集を発行し、ホームページで全文を公開しています。史料集を通じて、江戸時代の大津の様子を実際の言葉や文章で知ってもらうことができると考えています。

ここで史料集刊行後のエピソードを2つ紹介しましょう。ある日、令和4年に発刊した『膳所藩町奉行川那辺壮右衛門日記』の内容についての問い合わせがありました。公開した解読文を見て、そこに先祖の名前（新右衛門）が載っているようなのだが、史料集には「新左衛門」となっている、と。問い合わせを受けて「まずい、読み間違えてしまったか」と思ったのですが、原本を確認しても「新左衛門」となっており、記録を読み進めていくと、「新左衛門」が「新右衛門」に改名したという記事も出てきて、その家の歴史が史料集からわかったということがありました。解読・校正をしていた時には気にしなかった内容が、市民の方からの問い合わせで再認識できたことになります。

もう一つは、同じく発刊を続けている『大津百艘船万留帳』の解読文の中に、やはり先祖の名前があるという東京の方からの問い合わせでした。電話であれこれとお答えしたのですが、より詳しく知りたいとのことで家に残る古文書もご持参されて、翌月に当館へお越しになりました。この時、史料集以外の館蔵古文書も探索し、この方のご先祖が江戸時代の大津町で琵琶湖水運にかかわる両替商のような存在であったことが判明しました。

このように、史料集は作って終わりということではなく、それを使って歴史探求といった市民活動に役立ててほしいという思いで発刊しています。

なお、この古文書解読の史料集は、有志のグループである大津古文書輪読会と大津古文書研究会の方々による解読文をベースにしています。一字一句の解読に全力集中いただいている皆さんの協力で史料集が完成しているのです。

また最近では、大学や有志の方々の事業以外にも、地域の古文書を地域の方々で整理作業するという活動を共同で進めています。それが瀬田地域の神領（大野座）の皆さんとの江戸～明治時代の古文書の整理です。掃除・撮影をお願いし、博物館の方で目録作成を進めています。全部で4,000点以上あるので先は長いのですが、その成果の一部は令和7年度夏期のミニ企画展で展示する予定です。

こう考えると、膨大な未指定文化財としての古文書の調査・整理・史料集発刊は、大津市域や個人、家の歴史の存在証明ともなる歴史情報の保全に他なりませんし、それが市民の皆さんの活動なくして成立しないことを痛感します。

今後も変わらず、古文書の1通、1冊、また千切れた紙片の断片を見過ごすことなく、歴史情報を大切に拾い上げる作業を皆さんと一緒に続けたいと思います。

（学芸員　高橋大樹）

大津市内の学校資料を再調査中

大津市では今、多くの小学校が創立150周年を迎えています。現在の大津市内には37校の市立小学校がありますが、このうち23校が明治5～9年の創立です。150周年を迎える学校では、記念誌の制作をはじめ様々な記念事業がおこなわれており、改めて学校の歴史を振り返るきっかけになっています。

学校資料の可能性

学校が所蔵する資料は、学校の歴史を語るものだけではありません。それぞれの学区、地域の歴史に関わる資料も多くあります。大津市では、昭和50年代の『新修大津市史』編纂の過程で、各小学校に残る沿革誌や学校日誌のほか、村誌、郷土誌などの重要と思われる史料を撮影し、マイクロフィルムと紙焼きで保存しました。これらは当館に引き継がれています。学校沿革誌は、創立から年度ごとに学校行事や特筆事項を書き記しているため、学校のことだけでなく、当時の災害記録や戦時中の暮らしのようすなどを読み取ることができる資料です。当館では、平成14年（2002）の企画展「大津の小学校 ―130年のあゆみ―」開催の際などにも学校資料の調査をおこなってきました。

学校資料は、沿革誌などの文書記録や写真の他、明治時代以降の教科書、考古資料や民俗資料、美術工芸品、標本、歴代の教材教具など、さらに児童や生徒の文章や作品まで、幅広いものがあります。私が大津の学校資料に興味を持ったのは、企画展「大津の都と白鳳寺院」の事前調査の時でした。大津宮関連の出土品に志賀小学校所蔵のものがあり、詳しく見せてもらうために学校を訪れたのです。志賀小学校は、大津宮跡の錦織遺跡や南滋賀町廃寺跡のすぐ近くに位置しています。南滋賀町廃寺と滋賀里山中の崇福寺跡は、戦前に発掘調査がおこなわれ、大津宮の時期や奈良～平安時代の遺物が出土していますが、地元の子どもたちにもその歴史に触れてほしいということで、小学校に出土品の一部が寄贈されて保管されていました。市内の出土品を小学校が持っている場合があるのかと驚いた経験でした。

他にも、瀬田小学校の場合は、膳所城で使われていた「しゃちほこ」を所蔵しています。明治時代に膳所城が壊された時、城門が周辺の寺社に移築されたり、瓦が役場で買い取られたりしており、瀬田小学校では、大正時代から旧校舎の屋根瓦として膳所城のしゃちほこ一対を使っていました。その後、校舎新築の際に屋根から外し、1点は学校内で展示し、1点は当館の寄託品となっています。

また、毎年1月～2月頃には、小学校3年生の「昔のくらし」の学習として、洗濯板や炭火アイロンなどの昔の道具を題材にお話しをする出前講座のために、当館学芸員が学校を訪問しますが、学校にも古い生活道具や農具が保管されていることがよくあります。資料点数が多い学校の場合は、教室をひとつ使って、郷土資料室のように展示をしていることもあります。

このように、学校には、郷土学習の一助として、創立当初から各年代にわたって、その地域の資料が集まって来ているケースが多く、博物館でも把握できていない地域資料が保存されていることもあります。しかし、一方で、毎年大勢の生徒を迎えて送り出す学校という場では、教室の移動や校舎の移転、教員の異動も多く、資料の所在がわからなくなってしまうという危険性もあります。このような事態を防ぐため、まずは各学校にどのような資料が保管されているのかを把握する必要があり、過去の調査記録を元にしつつ、少しずつ学校を訪問して、再調査に努めています。

学校資料から戦時中の暮らしを読み解く

さて、今年は戦後80年の節目の年です。それに合わせて、当館では夏季企画展として大津市指定文化財「瀬田国民学校絵日記」の全点展示を計画しています。この絵日記は、昭和19年4月から昭和20年3月までの1年間、当時の瀬田国民学校5年智組の女子児童たちが書き綴った188日分の学級日誌で、戦時中の大津の子どもたちの暮らしがわかる貴重な資料です。これを展示するにあたって、できる限り市内の学校の戦時中の状況を知りたいと考え、各学校の沿革誌を読み解く作業もおこなっています。

これらの成果は、順次展示などでご紹介していきます。

（学芸員　福庭万里子）